

社会と経済の基底的关系構造と仏教

武 井 昭

The Base-Structure in the Relations between Society and Economy and Buddhism

Akira TAKEI

はじめに

仏教は、2500年以上に及ぶ長い歴史の中で多くの人によって生まれ、より根源的で、普遍的で体系性を持った宗教として発展してきた。そして、キリスト教、イスラム教と並んで、仏教は世界宗教としての地位を獲得してきた。これらの宗教は、人間存在が民族を超えて永遠普遍的の根源的關係の中に完全に位置づけされているということでもある。

それにもかかわらず、今日の先進国の工業経済体制の下では、これら世界宗教は、個人的にはともかく社会的にはほとんど認められていないどころか、否定的に捉える傾向が強まるばかりである。このことは今に始まったことではなく、「仏教的なるもの」に内在する永遠普遍的の「根源的なるもの」をめぐる常にそれに疑問を抱く人がいて、迫害を受けるときが周期的に訪れる。仏教はこうした数々の審判にこれまでは耐えてこられたが、これからも耐えることができるかどうかは保証の限りではないかもしれない。

それは、中世から近代に転換するときに、従来のフォーマルなものはリアリティのないものということになり、逆にインフォーマルなものとされた世俗的な社会や経済にこそリアリティがあるということになった。そしてその社会や経済が秩序ある発展さえ可能であれば、宗教のようなもの(バーチャル・リアリティ)は必ずしも必要であるとはいえないということになった。しかし、このフォーマルとインフォーマルな関係はこれまでほど確信のもてるものではなくなってきた。今日ではインフォーマルなものとされている宗教に内在している普遍的なものの存在を再評価するしかない状況が出てきたが、現状ではこうした期待を多くの人が抱くまでには至っていない。

ここでは、経済と社会が秩序ある発展の可能性はどこまであるのか、また仮にそれが可能であるとしたら、そのときに、仏教がどこまで貢献することができるのか、について検討し、それを通じ

て今日の社会と経済の根本的関係の全体構造を明らかに企図している。

・人間・社会の存在を規定するもの

人間は多様で多面的な存在である。それ故に、人間の本質をきてする要因も多数存在する。しかし、それらの中で他のいかなる動物とも異なる人間に固有の属性となるとかなり絞り込まれるが、ここでは、それらの中で、社会と経済の関係の根本構造を考えるに必要な以下の三つの人間像を抽出する。

(1) ホモ・サピエンスという「分別するもの」の存在の意義

今日の人間に至るまで非常に長い時間を要してきたが、今日の人間の根本的属性を直立歩行や道具の使用に求める考え方が依然として支配的である。この属性に焦点を当てると、「近代人」の誕生は、今から4万年前のクロマニオン人に始まるとされる。これがどこまで正しいかは定かではないが、西欧人とだぶらせる形で「ホモ・サピエンス」像が支配的な人間像とされてきた。

高度に発展した今日の文化や文明をポジティブに評価するならば、人間存在の最大の特徴を「理性」の働きに求め、「より理性的であること」が最優先されるべきであるという一面は恒久的に保持しなければならないが、しかしこれまでは、動物とは比較にならないほど文明は発達してきた反面、このままでは、「より人間らしく」生きてきたとはいえなくなってきたため、この人間像も所詮多数存在する人間像の一つにすぎないことにも真実味が出てきた。

しかし、どんなに矛盾に直面しようと、われわれはホモ・サピエンスという「近代人」である以上、この人類が滅亡するまで「理性」に託して生きるしかないのか。この地球上ではホモ・サピエンス以前ないし以後の人類だけが生存できるにすぎないのか。

(2) 「人間とは所帯(オイキア)を持つ存在である」ことの意義

こうした人間像を根本から反省することがホモ・サピエンスである人間ができるのかという疑問があるが、仮に可能であるとしても、どのような人間像になるのか。それは、直立歩行後で道具使用後において他のあらゆる動物と異なる人間に固有の属性としては、今西錦司によると、オスがメスの危機に際して命を賭けて保護し、そのメスと所帯(オイキア)をもつ点を指摘している。人間だけが子々孫々の系統を尊重し、一大文化を形成していることは説明を要しない。⁽¹⁾

人間以外でも群を形成し、人間に似た社会集団を形成しているものも見られるが、所帯を中心にした社会集団を形成しているのは人間のみである。これまでこの点に人間存在の根本的意義を見る見方はこれまで主流にはならなかった。しかし、クローニィキャピタリズムと揶揄される、中国、日本、韓国などの東アジアでは、「人間とは所帯(オイキア)を持つ存在である」(今西錦司)という考え方が今日でも根強く残っている。そこまで極端ではないにしても、世界各地で人間は「墓の

文化」を形成してきたことはこうした人間像の存在の証明であるといつてよい。

先進国では、工業化が進展するにつれて、共同体（スーパーオイキア）意識は希薄になり、また今日では子孫存続の親子関係とオスがメスを守る夫婦関係の分断が進み、所帯（オイキア）を基準にした文化が完全に変型しつつある。人間の間らしさは、オイキアとスーパーオイキアが根底から否定されるとき、人類、哺乳類、動物、生物へと退化していくことになるのか。

「人間とは所帯（オイキア）を持つ存在である」という属性が希薄になれば、共同体（スーパーオイキア）意識も希薄になる。逆に共同体（スーパーオイキア）意識が希薄になれば、所帯の意識も希薄になる。

近代	経 済（工業）	食と息の発展形態としての工業経済
近世	国 家	食と息の国家的関係
中世	職 能（身分）	食と息の身分的關係
古代	共同体（スーパーオイキア）	食と息の武力的關係の範型
原始時代	所 帯（オイキア）	食と息の基礎単位としての所帯の永続性
	人 間（ホモ・サピエンス）	
人間以前の棲息	人 類（ヒト科）	食と息の偶然的単位としての所帯の一時性
	哺乳類	
	動 物	
	生 物	

図1 人類の歴史とオイキア-スーパーオイキアの関係

(3)「人間とは自己の存在を他の一切の存在との関連の中で自覚する存在である」ことの意義

さて、人間が人間として存続発展する必要最低の条件がオイキアとスーパーオイキアにあるとするならば、これを完全に否定する人間像は誤りである。しかし、だからといってオイキアとスーパーオイキアを絶対視するならば、民族中心主義に陥り、部族間の戦争に終始することになりかねない。

オイキアとスーパーオイキアが人間として存続するときの社会経済の基礎（実体）をなすものであるとしても、それが絶対視できない範囲においてはじめて現実的意義を持つ。その絶対視にたがを埋めることができるのは、シュブランガー「常に最高絶対の価値を志向して努力する人間」とし

での「宗教的人格」をおいてない。絶対者を措定し、それに帰依する信仰型の「宗教的人間」は、たがを埋めることの容易であるが、また逆にたがを外すことにもなりかねない。⁽²⁾

絶対者を措定する「宗教的人間」の限界を克服するには、諸法の宗教的次元での自覚を実践する「宗教的人格」型の宗教がこの役割をどこまで果たすことができるかにかかっている。この型の宗教がこの役割を果たし得ないときには、オイキアとスーパーオイキアばかりでなく、一切の宗教にも否定的なホモ・サピエンスの人間像が跋扈することになる。しかし、この人間像では、今日のようにオイキアとスーパーオイキアという人間存在の原点すら否定されかねない。

・社会・経済の基底的关系構造

人間は多様で多面的な存在であるが、それが単に雑然と共生共存しているのではない。好むと好まざるとにかかわらずどんな小さな組織であってもまた地球的規模の組織であってもその組織をリーダーが選択する限られた価値観ないし人間像が支配する。さらに、その組織のリーダーはそれぞれの地域やその時々時代において支配的な価値観や人間像に大きな影響を受ける。

それでも非常に長い時間で見ると、政治、経済、社会のそれぞれのリーダーが価値観や人間像を選択する形で、何時の時代でもどこでも問題となる範型らしきものが形成される。それをここでは仮に「社会的なるもの」の原点を「息」に求め、「経済的なるもの」のそれを「食」に求め、それら「息」と「食」の間に挟まるものの関係によって社会と経済の基本的な関係描き、それが範型となって歴史的に発展していくときの構造を明らかにする。⁽³⁾

(1)「社会的なるもの」の根源としての「息」

1)「社会的なるもの」の根源としての「息」

以上の説明からも容易に推察できるように、人間が「社会的動物」であるという最後の根拠は、「オイキア」にある。ところが、アリストテレスが人間を「社会的動物」というときには、市民の都市に対する運命共同体的属性をいうが、このことはギリシャではスーパーオイキア(共同体)を社会の出発点においているということの意味している。しかし、オイキアは他者の存在の認知という社会の原理的根拠にはなり得ても、スーパーオイキアへと発展していくときの根拠とはなり得ない。

オイキアからスーパーオイキアへと社会的動物の質的变化をもたらしたものは、利害関係を含めた諸所帯の間で出される動物的な「息」であった。この息が合わないときには敵対的な社会関係が形成された。利害関係に限定されないこの関係が優先することは今日でも変わっていない。しかし、この「息」に頼っている限り、それによって形成されるスーパーオイキアもオイキアの域を大きく出ることはいない。

2) 「社会的なるもの」の発展の根源としての「言葉 数 文字」

1. 言葉と数

オイキア内部およびオイキア相互の社会的人間的関係が「息」に依存している間は、仮にスーパーオイキアが誕生したとしても、その規模や機能は著しく限られる。原始時代の社会関係は基本的にはこの「息」に依存していたが、行動範囲が拡大するにつれて、スーパーオイキア内部および他のスーパーオイキアとの関係において共同体として発展するには、少なくとも動物的な「息」だけでは意思の疎通ができない人に対して最低限度の伝達や連絡が必要になる。

さらに、正確に伝えるには、共通の理解が可能な現実中存在するものに名称が付けられ、その中心的な内容には数量で表現する必要が生じる。この数量についての客観的意識は、人間に固有のもので、スーパーオイキア間での対話や交渉の頻度が増してくるにつれて、最初は0と1のみであったあったのが、2と2以上（多い）という素朴な数え方に発展し、10進法、12進法と徐々に複雑になっていった。

2. 「文字」と「文字表現」の効能

こうしたスーパーオイキア間での対話や交渉の頻度が増してくるにつれて、それらを「文字」で表現する必要性も徐々に高まってくる。言葉と異なり「文字」で表現することの最大の働きは、個人的意見と乖離れて歴史的文献としてストックが可能になり、後世の人たちの学習の際の「データ」になることと現実の社会で起こった出来事を体験しない後世の人が追体験が可能になり、歴史の連続性の可能性が開けたことである。これにより、スーパーオイキア間の約束や関係の継続性が確保できるようになった。こうして、動物的な「息」に頼っていた段階のスーパーオイキア間で形成される社会関係は今日の社会関係の文化的原型となる可能性が築かれた。

3. 文字表現と「息」の関係

「文字」はそれを記した人の意図と独立して、その文字が持つ必然的論理によって一人歩きを始めるが、「息」はその場だけのものでしかないから永遠に文字のように実体から離れることはない。「話し言葉」と「書き言葉」は同一人物とは思えないほど、その雰囲気（息）が異なるのは珍しくない。文字表現の場合には「インフォーマルな顔」が背後に隠れるほど名文になるが、話し言葉の場合には、「フォーマルな顔」が背後に隠れれば隠れるほど対話が弾む。言葉の本来の役割を發揮する。要するに、「息」が伝わるということである。

いかに名文でも、名文であることの息は伝わるが、その人自身の出す「息」は伝わらない。親しいつきあいのある人の名文だけがその人を知る人にのみ、文字と息の両方が正しく伝わる。つまり、「文字」だけでは、その文字によって理解可能な範囲のフォーマルな関係しか相手に伝わらない。また「息」だけでは、その人の息はその人を直接親しく知る人にしか正しくは伝わらない。それでも、文字によって理解可能な範囲のフォーマルな関係であってもその人を全く知らない人が偶然正

しく理解するかもしれない。

(2) 「経済的なるもの」の根源としての「食」

1) 「経済的なるもの」の根源としての「食」

長い経済の発展の歴史から見ると、経済は「お金」で代表できる部分が小さくないことは多くの人の実感するところである。経済の長い発展の歴史からといても、「貨幣」が発明され、現実使用されるようになってからのことであるから、人類の歴史全体から見るとまだきわめて最近のことではない。

それでも仏教の歴史から見ると、遙かに前のことになる。仏陀によって集大成された仏教が当時の商人層に受け容れられたことの背後に、当時における仏教と経済の関係の特殊性がある。仏教以前にバラモン教等の宗教がインドでは権威ある宗教としての地位を確保していた。それらの宗教では、基本的にはカースト制度を基準にした教義が説かれていたため、低いカーストである商人たちは現実の社会での貢献度に比して低い評価しか得られなかった。

これに対して、仏教はこうしたカースト制度の原理的な克服の可能性を秘めている点が評価された。商人たちは「お金」は十分に持っていたが、その「お金で買えるもの」と「お金で買えないもの」があり、「お金で買えないもの」にその人間の存在の根拠がある。いかなるカーストの人間でも人間存在の根拠を正しく自覚することができるかどうかに関しては完全に平等である。仏教の「業」の克服の教えに商人階級の人たちは魅力を感じた。

2) 「経済的なるもの」の発展の根源としての「貨幣」

貨幣は典型的な機能は交換手段にある。したがって、貨幣が使用されるには、現実すでに交換現象が定着しているということが前提になる。したがって、定期であれ不定期であれ「市」ないし「市場」(いちば)が開かれていたということである。

さらに、交換手段としての機能を果たしているということは、貨幣に交換価値がすでに刻印されているということになる。その価値が数量で表示されているということは、文字の外に数量意識が多くの人の日常生活の中に定着しているということである。

そして、取って交換に踏み切るときには、その物の使用価値よりも交換によって得られる貨幣の数量的な価値方がトータルで価値があると判断している。逆にいえば、いかなる形態であれ、「貨幣」が使用されているということは、それだけ、交換される「物」が余っているという状況がすでにあるということである。貨幣はこうした社会経済的状况を他者に対してメッセージを発するときには評価手段として機能する。

(3) 社会と経済の基底的关系の構図

社会と経済の關係が「息」と「食」の間において形成される最も基本的な關係が社会と経済の原

型的次元で捉えられたものということができる。その場合、「息」と「食」の間に、言葉 文字と余剰食糧の数・量 貨幣が組み込まれる。この言葉 文字と余剰食糧の数・量 貨幣という四者の関係が明らかにされなければ、社会と経済の关系的次元の構図が描かれたことにはならない。

「言葉から文字へ」の発展と「余剰食糧の数量を基礎にした貨幣」の発展は、人間と他の動物との違いを決定づけることになった。この「文字」と「貨幣」の発明により可能になった社会と経済は、人間に固有の文明をつくる契機となった。つまり、この「文字」と「貨幣」の発展の歴史が人間の文明の歴史ということになった。そして、文字と社会の関係がその後の人間の社会性を規定し、貨幣と経済の関係が人間の経済性を規定することになった。

経済性をいくら高めてもその経済性の数量的限界は質量の両面の「余剰食糧」によって規定される。社会性については、識字と文学を中心にした学習効果を高めることによって文字と社会の関係がいかに複雑で多様化しても「息」のあった言葉が交わされる範囲が基礎単位であることに変わりがない。

経済の回路と社会の回路は或る意味ではそれぞれ独自の発展経路を辿って発展していくが、食する仲間が社会経済の実体であることから、いずれかの発展経路が著しく遅れるときには他の回路の発展もそれに合わせた発展をするしかなくなる。社会的発展は経済的發展に合わせて発展してきたと思いがちであるが、教育や科学技術の発展は文字と社会の関係を代表するものであるだけに、逆の関係にあったとも見ることもできる。

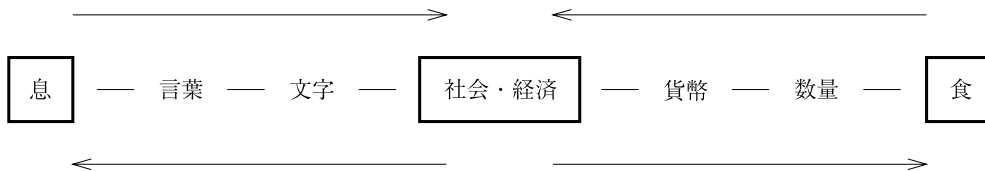


図2 社会と経済の基底的关系の構図

．アーキタイプとしての社会と経済の关系構造

社会と経済の基底的关系構造が以上のようなものであるとすると、この関係を基礎にして長い歴史的時間を経て、さらに具体的な関係の基礎になるアーキタイプが形成された。⁽⁴⁾とくに、近代社会とそれ以前の社会の間に決定的な変化が生じた。西洋中世では、フォーマルな社会とインフォーマルな社会が完全に分断され、フォーマルな社会が現実の社会を代表していたため、インフォーマルな社会は野蛮な社会とされた。

しかし、インフォーマルな社会においても長い時間をかけて徐々に文字と貨幣の機能分化が進むにつれて、インフォーマルな社会は野蛮ではなくて、逆に啓蒙の社会、つまり社会経済の現実であるということも多くの人にも実感するようになる。フォーマルな社会での文字と貨幣の機能はこの変

化に対応できず、ついにフォーマルとインフォーマルの立場は逆転することになった。

中世におけるインフォーマルな世界（世俗世界）がフォーマルになったため、世俗的な文字と社会と貨幣と経済の関係がフォーマルな関係になった。つまり、超現実的な世界を現実の世界であるとした宗教的次元の世界はインフォーマルな世界ということになり、逆に現実的な世界を現実の世界であるとした世俗的次元の世界はフォーマルな世界ということになった。その結果、従来インフォーマルな社会での文字と貨幣の機能がフォーマルになったため、現実的な文字と貨幣の機能は急速に発展することになった。啓蒙時代とはこうした時代のことをいう。

その結果、工業経済体制という形でこの時代は集大成することになった。文字と貨幣の機能の発展によって達成されたといってもよい。したがって、ここでは、まず文字と貨幣の機能の分化による急速な発展の意味を辿り、その限界の克服には仏教的な世界観に立つことの必要性について考察する。

（１）「文字」の機能分化とその全体構造

人間と同じような言葉を話す動物はいないことは確かであるが、それぞれの種の中で動物が意思を通じ合う音声が発せられていることは珍しいことではない。文字となると、他の動物の場合にもある可能性は完全には否定できないかもしれないが、それらを使って人間に匹敵する文化ないし文明をこの地球に限っては構築していないことはほぼ確実である。

その人間でさえ、文字が使用されるようになったのはわずか6千年前のことでしかない。文字の使用が可能になってはじめて過去の情報が保存され、その情報の学習が可能になるが、「文字で表現できるもの」の範囲が拡大するにつれてその働きも当然拡大する。「文字で表現できること」は、一般的にいえば、意思（感情）、状況（関係）、歴史（経過）、真理（芸術）の四つになる。つまり、自己及び他者の感情、自己と他者（もの）のおかれた状況（関係）およびそれらの時間的流れ（歴史）、文字の組み合わせにより醸し出される真理（芸術）であるが、さらに書き言葉で表現しても責任のとれる限りのものである。

しかし、言葉で表現する場合と異なり文書で表現されたことは半永久的に残るため、その人の真意と乖離してそれ自身として一人歩きを始める。したがって、たとえプライベートなものであってもその人の意志に反してそれがパブリックになるときは、そのことによって惹起された結果に対する責任を取る必要が生じることもある。如何に表現の自由があるといっても表現した結果について他者に与える被害に対してはその責任を免れない。「文字で表現できること」の場合にはこうした枠がはめられている。したがって、意思（感情）、状況（関係）、歴史（経過）、真理（芸術）の四つのいずれも著しく限られていると見なければならぬ。

こうした枠は歴史的社会的に形成されていく。言葉でしゃべる場合と異なり、文字で表現する場合には、文字で表現することに固有の「働き」というフィルターを通したものに限られる。そのフィルターの「働き」をする抽象的一般的なものとしては、伝達、格率、学習の三つである。そして、

メディアの発達によってこれらの機能は格段に進歩し、その結果、「文字で表現できること」に内在する日常生活における現実的效果（働き）である、具現化、複合化、体系化、一般化、情報化の五つの点でも飛躍的な発展を遂げてきた。⁽⁵⁾

「文字で表せるもの」

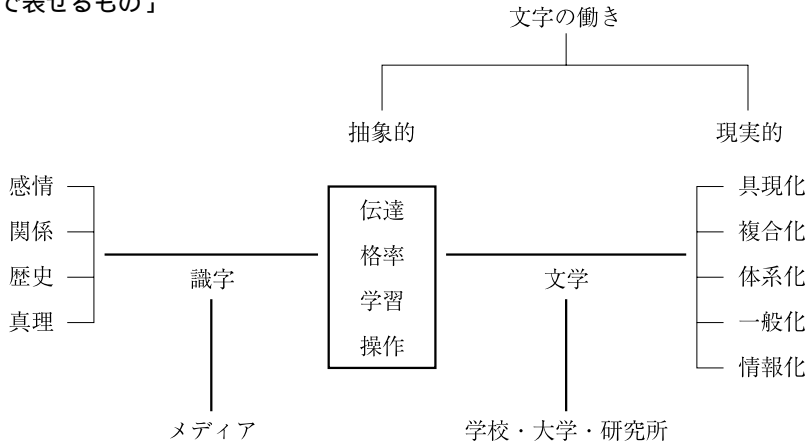


図3 「文字」の働きの全体構造

(2) 「貨幣」の機能分化とその全体構造

「文字」並んで「貨幣」もそれ自身の背後に自己完結したコードよりなる解釈可能な複数のシステムをもつようになる。「文字」の場合には文字で表現されたメッセージを解釈するときの論理的コードが、「貨幣」の場合にはその価格の背後に経済的コードが形成される。しかも、そのシステムは、現実の社会とは無関係にそれ自身の論理に従って、絶えず複雑で多様化の方向で発展した。

今日のように、貨幣経済が一般化し、貨幣による評価が経済原理だけにとどまらず、社会原理としてもあらゆる活動の基準になると、それだけ、「貨幣で買えるもの」の領域は拡大するようになる。直接購入できるものは、原初的には、「食糧」であり、今日では貨幣で表示される「モノとサービス」の全てであるが、間接的には、自由、権力、名誉、正義、健康、愛などもある程度買うことができると思える人も少なくない。⁽⁶⁾

貨幣の本質的、抽象的な働きとしては、交換、評価、流通、貯蔵、信用創造などがある。この中で、政府の信用を担保にして中央銀行券の発行によって各種の金融機関は信用創造を行うことができるようになった。このシステムが一般化することによって、貨幣の具体的現実的働きは、数量化、集計化、操作化、産業化、記号化、ネットワーク化など飛躍的に拡大してきた。

近年、こうした信用創造は多様化大規模化が進み、その結果これまで辛うじて担保価値のあった金、レアメタル、不動産、金融資産等が次々担保価値が希薄化し、今日では貨幣はその背後に経済の実体を示すとされるものが無くなり、ついに単なる記号となり、それを証券として売買することで一時的に貨幣としての機能を果たすだけでよいとされ、現実の社会経済から完全に遊離し、ゲーム以上の意義はなくなってきた。

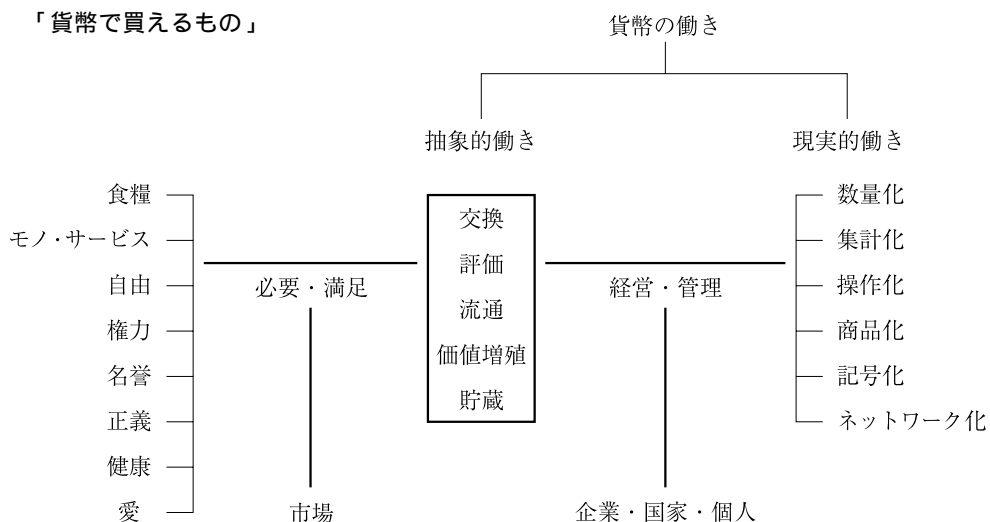


図4 「貨幣」の働きの全体構造

(3) 社会と経済の関係のアーキタイプの構造

仏教の根本義は人間が一切の存在の如来、実相、法を自己の存在(身心)をかけて自覚することに無限に精進することにあるが、我執に囚われている肉眼で見ている限り、自覚することはできない。また、他方で人間である以上完全に我執に囚われないようになることは不可能であるという限界があるため、その限りで描かれた如来、実相、法も完全ではない。こうした限界があるにせよ、現実の世の中で可能な限りそれぞれの如来、実相、法を自覚し、そしてそれを具体的な活動を通して実証していくしかないが、そのときの社会と経済の基底の関係構造と仏教の関係はどのようなのか。

釈迦が只管打坐の坐禅の実践の中で修得する呼吸法でもそれを自覚したときの智慧を「般若の智慧」というが、そのときの「智」は、平等の中に差別を見るはたらき、つまり直観による知識をいい、「慧」は、一切の事物の平等なるを証する、直証で得た知識をいう。この「般若の智慧」で見ると社会と経済の関係はどのように捉えられるのか。ここでは、以下の三つの視点から整理することにする。

1) 社会と経済の関係のアーキタイプを形成する要因としての「リアリティ」と「バーチャル・リアリティ」

何が「リアリティ」で何が「バーチャル・リアリティ」であるかは何時の時代でも普遍である。しかし、人間の判断が加わると、「リアリティ」とは別にフォーマルなものをリアリティであるとし、インフォーマルなものはバーチャル・リアリティであるというレッテルが貼られるようになる。

今日では、それに文字と貨幣の機能分化が高度に発展したために、ついにフォーマルとインフォーマルの間にコンピュータシミュレーションによる「バーチャル・リアリティ」という情報化時代に固有の世界が創出されようとしている。

それが現実の社会と経済の基底的关系を規定する可能性が出てきた。現実に似て非なる状況を「バーチャル」と言い、その背後にあって動かぬ事実と思われる状況を「リアリティ」というとき、それがもし「バーチャル」の象徴が「文字」で、「リアリティ」のそれが「貨幣」であるとするならば、「バーチャル・リアリティ」は、「貨幣化された文字」か、もしくは「記号化された貨幣」ということになる。

この「貨幣化された文字」か、もしくは「記号化された貨幣」は、文字と貨幣の機能分化による世俗的社会経済システムによるリアリティへの接近に対しては所詮「バーチャル・リアリティ」でしかない。この視点から地球環境問題の解決をいかに試みても所詮トータルで普遍的な「リアリティ」からはますます遠くなる。「リアリティ」に対していかに似ていても所詮「バーチャル・リアリティ」をでることができない。

2) 社会と経済の关系のアーキタイプを形成する要因としての「社会」と「世間」

農業や商業が社会経済システムの中心にある段階までは、まだ「世間」と区別される「社会」（ゲゼルシャフト）は形成されなかった。ところが、機械生産による工業が社会経済システムの中心に置かれるようになると、人間の自然な感情が活かされる世間の側面は著しく退化して、経済的关系が中心の社会が形成されるようになった。⁽⁷⁾

この社会が形成される前後に、文字と貨幣の機能分化が急速に進むようになり、図5に示したように、今日までに、経済的次元、社会的次元、システムの次元、地球環境の次元へと発展してきた。しかし、このような次元で捉えるしかなくなっているということは、逆に言えば、それだけ環境、システム、地球がそれだけ危機に瀕してきたということでもある。

3) 社会と経済の关系のアーキタイプを形成する要因としての「無下心」（分別心）と「無上心」（菩提心）

「絶対なるもの」の存在を信仰することによって世俗的現実の社会経済活動の有限性とその根拠づけを行ってきた一神教の国々と異なり、こうした存在を措定しない仏教の場合にはそれに代替できる可能性を持ったものを与件とするしかない。

それは、一言でいえば、「無上心」と「菩提心」の关系で捉え、そしてそれを実践することにより修証するしかないという可能性である。その場合の「無上心」とは、現存する最上の問に対して自らの身をもって答えようとする心であるといえよう。現状では、少なくとも仏陀が立てた問以上の問を立てることが望まれるが、それは至難の業である。それ故、われわれは、それが具体的な生活の場で実践するときの心である「菩提心」をもって、無上心との関係において自らが実践できる枠の中で具体的にこの世の真の利益になることに貢献することに全力投球するしかない。

ところが、世間と区別される「社会」において経済と社会が秩序ある発展の可能性だけを追求するときには、一定の条件のもとで初めて成立するシステムとしての社会と経済の間における世俗的

日常的関係において最も最適であると思われる秩序がリアリティに代替する。このモデルで代替可能であると多くの人が思うようになれば、その後はそのモデルを使ってその目的の実現に有効な道具の開発に邁進すればよい。このような一連の行動を展開するときの心的作用をここでは「無下心」(分別心)と呼ぶ。

近代国家を含め近代社会が誕生・発展することの原動力をこの「無下心」(分別心)に求めて世俗的な豊かな社会の達成をひたすら追求してきた。確かに先進国に限ってはその目的を十二分に達成できたが、ここにきてこれ以上発展することに意義は見いだせなくなってきた。それにもかかわらず、一層の発展をめざす国とそうでない国との間に軋轢が生じてきた。⁽⁸⁾

「無下心」と「無上心」の関係を「あれかこれか」の二者択一の関係で捉えている限り、仏教的な眼で見ることはできないが、しかし何時までも「無上心」を「無下心」の枠の中に閉じこめることはできない。このままでは、環境、システム、地球の危険な事態を招くことになるからである。この危機を根本的に回避するには、これまで排除してきた「無上心」をもってバーチャル・リアリティをリアリティに戻すことである。バーチャル・リアリティをもってバーチャル・リアリティの弊害を取り除くことには限界がある。「無下心」によって構築されたバーチャル・リアリティの世界をリアリティに戻すには、それぞれの次元において実体をもったものの上に再構築することである。

具体的にいえば、図5で示したように、世間的次元、人倫的次元、自然的次元、実相的次元に遡り、それぞれの段階に応じた超現実的なものとの関係において意味づけを行い、それを現実の歴史の中で修証していく。このことを仏教は説いているといえよう。

まず、「世間的次元」で言えば、人間が世間において生きていくための根源的な行為である「対話」と「労」の意味を「無上心」をもって根本的に問い、そして絶えずそこに戻り、「対話」と「労」の間にある、文学 祭事 組合 パザールの関係を具体的に構築する。以下同様に、「人倫的次元」であれば、人間として生きていくときに必要な基本的な倫理感は「習俗」と「農」にあることを「無上心」をもって根本的に問い、そして絶えずそこに戻り、「習俗」と「農」の間にある、民族と「村落」を基礎にしてそれらの具現化を図る。

同じく、「自然的次元」については、「火風」と「地水」の場合には、両者の間に介在するものはない。「火・風・地・水」は人類の誕生を可能ならしめるもので、その秩序を破壊しない限りでしか人類の進歩発展もない。このことを「無上心」をもって根本的に問い、この事実在即した生活をする。最後に、「実相的次元」については、キリスト教のような一神教に与することができないときには、人間の拠り所は「現実」そのものである「実相」に身心ともに限りなく近づく努力をするしかない。

こうした関係は、途上国では現実性を持っているが、先進国では過去のプリミティブな段階のものでしかなくなっているが、今日においても無上心をもって現実を見るとき、その基底には厳然と存在しているものである。それだけでなく、人類の長い歴史から見れば、再び社会と経済の基

底的关系がリアリティ（現実性）を持つ可能性は否定できない。近代以後に文字と貨幣の关系において「火・風・地・水」に内在する秩序をはるかに超えた発展をしてきたが、その発展の近代的関係構造は、ここでは説明を省略するが、結局バーチャル・リアリティをもってリアリティに代替することに邁進してきた産物であるといえるであろう。

所詮一例にすぎず、きわめて不十分ではあるが、社会と経済の原理的关系と歴史的关系の关系は図5のようになる。このような図の中に仏教の仏教たる所以は、「見えない世界」を無上心と菩提心をもって「見える世界」との关系を具体的に明らかにし、実践することにある。その場合、「見える世界」を見ることよりも「見えない世界」を觀ようとしなければ、両者の关系を明らかにしたことはない。一朝一夕にできることではないどころか、完全に行うことは永遠にできないが、不十分不完全であつてもとにかく「見える世界」と「見えない世界」の关系の全体像を描いて、はじめて誤りに中立な現実となる。一神教の国においては、「見える世界」と「見えない世界」を明確に分け、神の領域には踏み込めないため、人間が実相に迫るときに限界をもつ。仏教にはその限界がないという特長をどこまで行かすことができるか。この特長がマイナスに作用しないためには、常に「無上心」と「菩提心」を発することが必要条件になる。

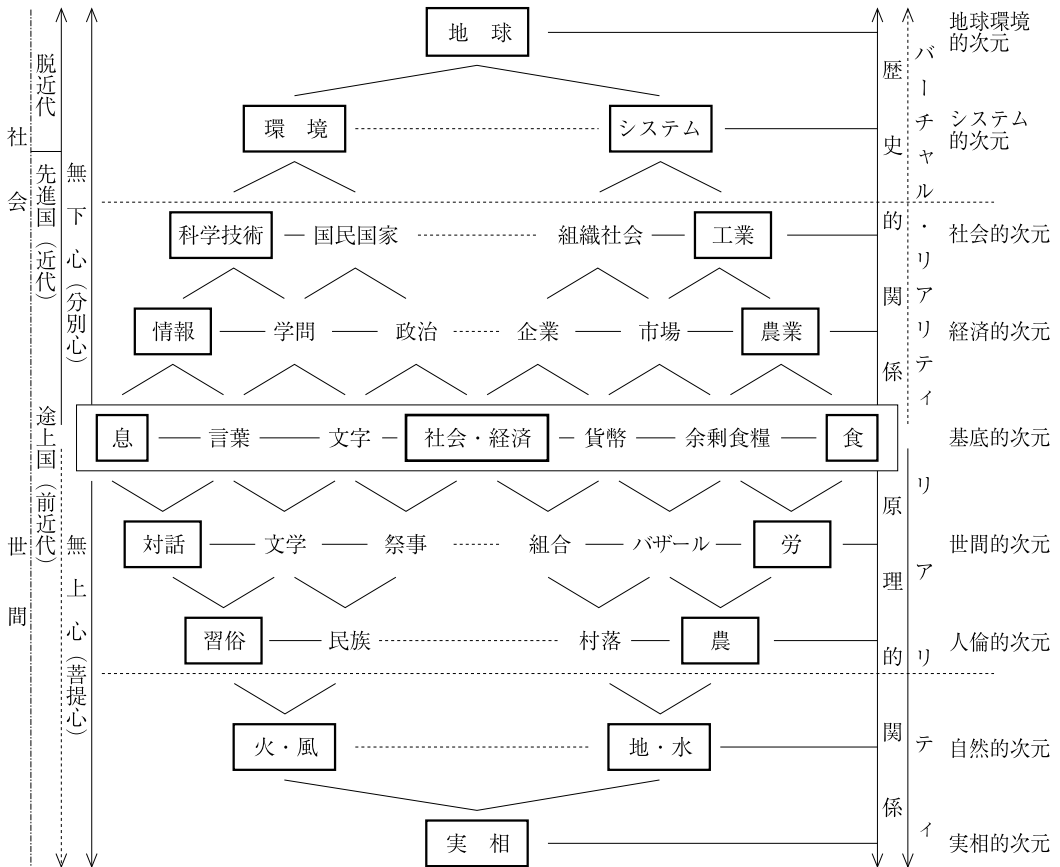


図5 アーキタイプとしての社会と経済の关系構造

おわりに

仏教の視点に立ち、社会と経済の近代的関係の根底にあるものを描き出したものを基底的关系構造というならば、筆者には現時点では図5以上の原像を描くことはできない。現代においては仏教の視点に立って、社会や経済の原像をイメージし、それらの関係をいくら追求しても無上心と無下心の間にある典型的関係を正しく描くことに失敗するならば、すべて徒勞に終わってしまう。本稿で展開した試みも所詮一つの試みでしかないが、こうした試みを積極的に展開されるようになってはじめて基底的关系構造が歴史的に意味のあるものになりうる。

今日の工業経済が依って立つところの社会経済システムは、いよいよ地球環境が危機的状况に急速に近づいていることに気づかなければならない。工業経済を基礎にした近代的社会経済システムも中世から近代に完全に転換してから4世紀とそこに至る準備期間の4世紀を加えると、8世紀におよび、ここで展開してきた社会と経済の基底的关系構造と仏教の関係から見ると、西洋中世において当初に描いた根源的关系と全くかけ離れた事態を招来していることに気づきはじめる人が増えてきた。しかし、それに代替するグランドモデルの提示にはまだ多くの時間を要するであろう。

(たけい あきら・本学経済学部教授)

註

- (1) 「オイキア」の中に「人間」と他の生物と決定的に区別されるものが含まれているという今西錦司の指摘は、人間存在の「倫理性」が内包されていることに求められる。cf. 今西錦司『人間社会の形成』NHKブックス40、1966年。
- (2) 「宗教的人格」の方が「宗教的人間」より普遍性を持ったものとして捉えられている。人間の単なる信仰心や人間的「理性」をさらに根拠づけるものとして「人格」が指定されていることに注目する必要がある。人間より上位にあり「神格」に繋ぐものとしての「人格」は、ホモ・サピエンスという人間像の限界を超えることも可能にするからである。
- (3) 現代の社会経済システムを再構築するにはその原点に回帰するしかない。その原点を何にとるかによって構築されるものが決まる。ここでは社会と経済の端緒としての「息」と「食」に求める。高度に発達した文明の崩壊を避けてソフトランディングするには、現代文明の中での「息と食」と「文字と貨幣」の間にある溝が埋まるだけの具体的なシステムをどこまで提示できるかにかかっている。
- (4) 今日では社会的価値より経済的価値が上位に置かれるようになったため、両者の本来の関係をイメージすることができなくなった。この本来の関係をここでは「基底的关系」と言いたい。その関係は、現実の歴史を超越した原理的关系と現実存在する歴史的关系の基点ないし基層にある関係である。このことを強調するため、敢えてBase-Structureと表現し、それを基礎にして原理的發展と歴史的發展のバランスのとれた自然な形態の关系構造をアーキタイプのそれと名づける。
- (5) 言語と区別して「識字」に焦点を当てることの意義は、今日のデジタル化を進展との関係を考え、人類のこれまでの文化と文明の意味を問い直すとき、小さくない。デジタル化によって具現化、複合化、体系化、一般化、情報化の五つの機能がつながる可能性が高まり、最広義には文学と言うしかないが、識字と学習の関係の全体構造が日常生活の中で明らかになってきた。さし当たり、菊池久一『識字の構造』劉草書房、1995年を参照。
- (6) 今日の文明の端緒は「食糧」の購入制度の定着に始まる。食糧の捕獲や収奪の段階では文明が發展する可能性は乏しいが、余剰食糧が存在する程度に応じて集落ができ、それを購入することで生存が可

能な人たちが都市を建設するようになって文明が飛躍的に発展するようになった。さし当たり、武井昭・岸田孝弥『都市型産業と地域零細サービス業』日本経済評論社、2003年を参照。

- (7) この典型的ケースは江戸と東京の関係であるといえよう。さし当たり、武井昭稿「文化としての東京と首都圏発展の構造」、高崎経済大学附属産業経済研究所編『「首都圏問題」の位相と北関東』日本経済評論社、1994年所収を参照。
- (8) 「無下心」は、筆者の造語であるが、無上のもの、この上ないものをめざすことよりも「よりポジティブなもの」を追求することが優位するということを示して言う。仏教では「分別心」を指しているが、ここでは仏教で言う分別心では今日の状況を説明するには不十分であることと「無上心」の重要性を喚起するという判断から敢えて「無下心」という言葉を用いる。

参考文献

- (1) レヴィナス、E. 『貨幣の哲学』、合田正人・三浦直希訳、法政大学出版会、2003年。
- (2) レヴィナス、E. 『倫理と無限』、原田佳彦訳、朝日出版社、1985年。
- (3) ブレース、C.L. 『人類の進化 人類と文化の起源』、香原志勢・寺田和夫訳、鹿島出版会、1972年。
- (4) パルトマン、A. 『生命のあるものについて 生物の科学と人間』、八杉龍一訳、紀伊国屋書店、1976年。
- (5) ミコッド、R. 『なぜオスとメスがあるのか』、池田清彦訳、新潮社、1976年。
- (6) ミズン、S. 『心の先史時代』、松浦俊輔・牧野美佐緒訳、青土社、1998年。
- (7) ラントマン、M. 『人間学としての人類学—人間の自己理解の歴史と現況』、谷口茂訳、思索社、1972年。
- (8) 菊池久一 『識字の構造』 劉草書房、1995年
- (9) 江原昭善 『人間性の起源と進化』 NHKブックス、1987年。
- (10) 江原昭善 『人類—ホモ・サピエンスへの道』 NHKブックス、1987年。
- (11) 小原秀雄 『哺乳類の世界』 NHKブックス、1987年。
- (12) 道元「発無上心」の巻、『正法眼藏』所収。
- (13) 玉城康四郎 『仏教の根底にあるもの』 講談社、1982年。
- (14) 難波田春夫 『国家と経済』 早稲田大学出版部、1992年。
- (15) 武井昭 『現代の社会経済システム』 日本経済評論社、2003年。

追記

飯岡教授が小生の主宰する究禅会（高崎市内長松寺）に数年参禅されたことを想起してこの拙稿を捧げる。